書評

小葉田淳編著

岡本村史

岡本村は福井県今立郡にあり、武生市の東方約八粁にあたる。古来、越前五ケの紙をもつて知られたところであるが、このたび、小葉田教授を中心にその村史が編纂された。

村史といつても、狭小な郷土のみに蹋蹐せず、視野をひろく日本歴史全体において叙述するのが、戦後の新しい傾向であるが、『岡本村史』もまたそうしたすぐれた成果の一つである。新村出博士が序文でいわれているように「岡本村を核心とした越前造紙業史と其の背景又は環境の、過去及び現在」とでもいうべきものが、この『岡本村史』である。

本書は、『本篇』と『史料篇』の二冊よりなり、『本篇』また全体を三部に分つ。

「第一編、岡本村の古代と中世」は、岸俊男氏の執筆担当で、はじめに地理的概観をしたのち、古代から中世末にいたる当地方の政治・社会・文化をのべ、そのなかに製紙の歴史を位置づけている。稀少な資料を、村内資料のみならずひろく諸書から採集駆使し、村の歴史が日本歴史全般につらなることを明らかにした好編である。

「第二編、近世の村落」は、宮川満氏の執筆担当で、この村が近世村落として形成されてやがて幕末におよぶ歴史と生活がのべられている。太閤検地前後の諸政策、村内の諸階層、村内外の騒動などを、詳細にのべたのち、村の衣食住の生活にも説きおよび、もつて村落史を具体的な様相においてしめくくるとともに、製紙業の発達の基盤となつた社会的諸関係を明かにしている。一編の論文としても推奨されよう。

「第三編、近世製紙業の発達」は、小葉田教授の執筆担当で、ここではもつぱら近世製紙業の諸相がのべられている。この方面に全く素人な筆者には、紹介する資格もないほどであるが、「誂物」と「商物」、すなわち幕藩支配者や諸社寺のための製紙と一般商販のための製紙という、近世諸産業が一般にうけねばならなかつた特殊な規定が、製紙技術や商業資本の発展と制約を叙述するなかで、きわめて具体的にのべられている点は、まことに興味深い。比較的研究の乏しい分野であるだけに、なおさら類少い労作というべきである。

『史料篇』は、大滝神社文書一四三点と、三田村文書三一九点を収める。南北朝時代以降江戸末期までの岡本村に関する在地史料であつて、うち若干は、内容が省略されている。村史の全史料でないことはもちろんであるが、今後の研究に資するところ大なるものであろう。本篇に並ぶほどのこの『史料篇』は、著者の特別の配慮によるものである。

さて以上の概観でもすでにあきらかなように、この村史は、いくつかの特徴をもつている。

一つはいうまでもなく村の歴史としてのそれである。筆者もかつて小葉田教授のお手伝いに岡本村を訪れたことがあるが、いま本書をみて、まざまざと村の風貌ともいうべきものを想起し、あらためてその歴史の詳細を知りえたのであるが、まして村に住むひとびとには、つきせぬ感懐を催すことと推察されるのである。それは、ただに郷土愛の問題ではない。「あとがき」にもしるされているように、この村史には、故牧野信之助氏以来の二

十年になんなんとする企画の由来がある。しかもその間の坐折や困難をこえて、いまこのような大著ができ上つたのは、ひとえにその郷土愛を原動力とするものにほかならぬ。本書が、製紙の歴史を中心に、ひろく村の生活や伝承に説きおよび、史料的にあたうかぎりの範囲にわたつて「村」が叙述されているのは、よくこれにこたえたものというべきである。

第二は、これもいうまでもなく、和紙の商工業という特殊な、しかも代表的な歴史であることである。さきにもふれたように、この方面の研究はことに乏しいのであるが、それが、紙だけでなくその生産の場において解明されたのである。けだしこのような特産物をもつ村は、全国的には数多いであろうが、岡本村は幸いに豊富な資料保存にめぐまれ、ここに容易にはもとめられない村史ができ上つたのである。このことは村の方々が村史の編纂に努力された理由でも誇りでもあるとともに、和紙研究家のための貴重な歴史というべきであろう。

さらに第三に、本書が日本史の研究のために果す意義についてふれておきたいとおもう。それは、以上のような結果、本書はただの村史、ただの製紙史ではなく、農村史を特殊「商品」生産の角度から検討すべき数々の問題と資料を提供しているからである。戦後日本史の研究は、農村の社会構造の究明にめざましい進歩がみられたが、反面商工業ことに技術に関しては抽象的に重視すべきことがいわれていても、実際には具体的成果に乏しかつたのである。しかるに本書は、その二つの面を綜合的な形で解明すべく具体的な成果を示したのであり、またそれだけの学問的な評価にもたえうるほどの周到な用意もなされている。別冊『史料篇』、図版九七、統計表一三五のほか、懇切な註にいたるまで、すべて学問的労作としてなんら欠るところのないものであつて、かつて地方誌についてわれわれがもつていた不満は、ここにほとんど解消されているのである。

ほんの表面だけを紹介する間に、はや紙数はつきてきたが、なお少し、魯をえて蜀を望む言葉をつけくわえたい。

それは「あとがき」に著者みずから記されているように、本書では近代の叙述がついになされなかつたことである。諸々の事情をよく知りつつもなおこのようにいう理由は、説明するまでもなかろう。ただそれについて切望しておきたいのは、史料の保存である。今日の成果が、前述のように豊富な史料に依拠するところ大であることをおもうとき、他日着手される近代篇のために、とくに村の方々にこのことをお願いする次第である。

なお、利用者の便宜からいえば、この種のものとしてはとくに、内容の細目、図版・統計などの一覧や索引がほしかつた。また『史料篇』についても、編年順に史料を配別するか、さもなければ編年目次を附してほしかつたとおもう。村史はたんなる学術書ではなく、やはり一面では今後利用さるべき個別研究であるからである。

以上、蕪辞をつらねたが、筆者の意図はただこの紹介の役を果しうれば達せられるのである。ともあれ、多くの方々が、一度本書を手に実見されたら、この拙い紹介よりもさらに多くのものを見出されるだろうことは、間違いない。（『本篇』アート八頁、図九七、表一三五、本文四三三頁、『史料篇』アート四頁、本文二六四頁、昭和三一年九月岡本村史刊行会発行、非売品）

――黒田俊雄――